
秘密の花園

三月やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の花園

【Nコード】

N0724B

【作者名】

三月やよい

【あらすじ】

彼女は「先生」俺は「生徒」使い古された表現では二人は「禁断の関係」穏やかで静かな午後のお茶時間。

(前書き)

ゆったりとしたお茶の時間をイメージしました。

さらさらと刻む時が二人のタイムリミットを示しているようだ。砂時計の水色に光る砂を眺めているとふとそんな詩的な思いが頭をよぎる。

彼女は「先生」そして俺は「生徒」……。
二人は陳腐すぎる表現では「禁断の関係」となる。
理科実験室での事実上俺しか部員のいない弱小部活・科学部を口実とした

逢い引きはいつも穏やかで禁断の恋人たちの逢瀬というよりも姉と弟の休日のティータイムのようだ。

「ちよつと待っていてね。」

まだケーキ食べちゃだめよ。

この砂時計が落ちきつたら紅茶の蒸らし時間が終わるから」

俺は紅茶の抽出時間の間、向かいに座る先生・

二人きりの時だけその名前を呼ぶことが許される

若く美しい女性を観察する。

黒目がちの大きな瞳も小振りな唇もまるで少女のようだが

白衣が包むその肢体は

（残念ながら中身を見たことはないが……いや、もちろん見たいよ）

確かに大人の女性であることを思わせるのに十分だ。

「今日はレモンババロアを用意いたしました」

ウエイトレス風の口調でお手製のババロアにスプーンを添えてくれる。

「ババロアを凝固させるゼラチンはアミノ酸のプロリンが豊富で……」

化学教師として言わずにはいられないのだろうか？

知っていたとしても使うことのなさそうな知識を彼女からはよく得

る。

そんなことを話す彼女はいつにもまして目がきらきらして嬉しそうだ。

「あ、あのね、お茶終わったらでいいんだけど・・・」

届いた化学肥料を温室まで運ぶの手伝ってもらえないかなあ？」
そんな先生が申し訳なさそうにこちらを伺う姿が愛らしい。

「今やろうか？どうせ猫舌で紅茶さめるまで飲めないでしょ？」

「いいの？結構重いよ？」

「あのね、俺の力がはあるんだよ、一応」

これかな？と俺は床に置いてあった40センチ立方ほどの段ボールを持ち上げる。

中身な化学肥料とのことで見た目よりは結構重く感じる。

「ありがとう、段差気を付けてね」

そう言ってる本人が温室の敷居で躓いてる。

流石に温室の中は湿度が高く、入ると沢山の花々が目に付き
甘い芳香が漂う。

・ 蘭の一種、小振りのひまわりそして濃いオレンジ色のコスモス・・・

俺の知識だと一緒に「綺麗な花たち」と呼びたくなるモノだが
彼女にとっては大事な大事な宝物たち。

うっかり踏みつけたり制服に引っかけて花を落としたりしないように
慎重に段ボールを温室の奥まで運び入れる。

ぱちぱちぱち

彼女は大袈裟に拍手しながら

「すごい！ありがとう！！私一人だと全然動かせなくて・・・」
と潤みがちな瞳で俺を見上げる。

・・・まだ大丈夫。

時間はあるはず。

「ねえ、じゃあお礼もらってもいい？」

理科室の方から誰か来る気配はない。

グラウンドからこの温室内は大きな椰子の木が目隠しとなつて中は見えないようになっていた。

彼女はまだ俺をまるで小動物のような無垢な顔で見上げている。

「お礼に・・・」

そつと右手を彼女の頬に手を添え左手をその細い肩にかかる柔らかい髪に絡めた。

ふわりとシャンプーの香りが俺の気持ちを焦らせた。

「え・・・？」

びっくりしたように大きな瞳を更に見開き身を固くする

彼女にそつと顔を近付けて・・・

「きゃっ！」

「うわぁ！」

唇まであと15センチ！つてトコで二人の場違いな悲鳴が響く。

「・・・んもー何でこうなるかなあ？」

彼女はびっくりして後ずさつたところで

花壇の煉瓦を踏み二人してバランスを崩してしまった。

どさっ

崩れた彼女を支えようとしてバランスを崩し

その場で座り込んでしまった二人。

もうびっくりするやら残念やらで笑うしかない。

つてか笑いが止まらない。

そんな俺に釣られて彼女もまるで子供のようになんて声をあげて笑った。

「だってびっくりしつちやっただんだもんっ急だし」

怒ってはいないようだ。

よかった。

どこも痛くなさそうだし取り敢えずは安心。

「あのね、そゆコトはもつとね・・・」

彼女はふと真面目な顔になり俺の頬にひんやりとした手をあて

そつと顔を近づけてくる。

ふわりと甘い髪の香りが何かくすぐりたい。

あ……しまった……もう……

ばちんっ

まるでブレーカーが飛んだような音と共に周囲が真っ暗になり
彼女もまるで楽園のようだった温室の風景と香りも
瞬時に消えてしまった。

「あーあ。

やっぱりタイムアップかぁ……30分ってやっぱり短いなあ」

あそこで転ばなければイケたのに！と一人ごちしながら

僕はヘッドフォンとモニターのついたゴーグルを外し2メートル四方の

狭いバーチャルリアリティルームからでる。

いくら座り心地のよいリクライニングシートとは言え30分

身動きせずに座っていたら多少は肩が凝るもんだなと腕を伸ばす。

さっきまで身を包んでいた高校の制服のさらさらした

ブレザーの手触りが何だか懐かしく今着ている白衣を

脱ぎたい衝動に駆られる。

バーチャルリアリティのプロトタイプを開発者自ら体験してみたが
これは結構良い出来かもしれない。

あの世界では何だか考え方も変わるような気すらした。

普段よりも強引な自分。

レポートにその心理変化部分も加えておこう。

視覚情報はゴーグルのモニターから、聴覚は3Dサウンドを

ヘッドフォンからそして嗅覚、触覚、味覚は脳へ直接信号を送ることにより

「嗅いだ、触った、食べた」と錯覚を起こさせてあたかも体験した
かのように

感じさせるプロジェクトはここ数年で飛躍的に進んだ。

このバーチャルリアリティプログラムは自閉症の治療から

対人恐怖症の改善、そしてもっと下世話なところでは性産業への

売り込みも視野に入れている。

特に性産業においてはこのソフトを購入するための初期費用は結構高いが、

客好みの相手が確実に現れるし長期的な目で見るとヒトを雇うよりも安くなっていくこともあり新たなカテゴリーと成長するだろう。

「エロ系もそろそろ取りかからないといけないかなあ・・・」

先生の柔らかい髪感触と甘い香りがまだ頬に残っているようだ。プログラムの何カ所かをチェックしながら

「次は同級生にしようかなあ・・・」

なんて先生が知ったら浮気かな、こりゃ

そうひとりごちしながら、僕はふと思いの外自分が「先生」にハマっている事に気付き・・・ミイラ取りがミイラにならないといいな・・・

とぼんやり考えた。

バーチャルリアリティの中にしか存在しない彼女は勿論実体がない。彼女を実体化したい・・・

僕の次の研究テーマはアンドロイドにしようと思った。

こういった「欲」が科学技術を進歩させるんだろうな・・・

僕は自分で煎れた紅茶をすすりながらも一度モニター画面に目をむけた。

「先生が煎れてくれた紅茶の方がもっと香りがよかったな」

(後書き)

ジャンルを「ファンタジー」にしているのか
悩みモノだったので「仮想現実」がテーマだったので
ファンタジーにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724b/>

秘密の花園

2010年12月21日15時19分発行